

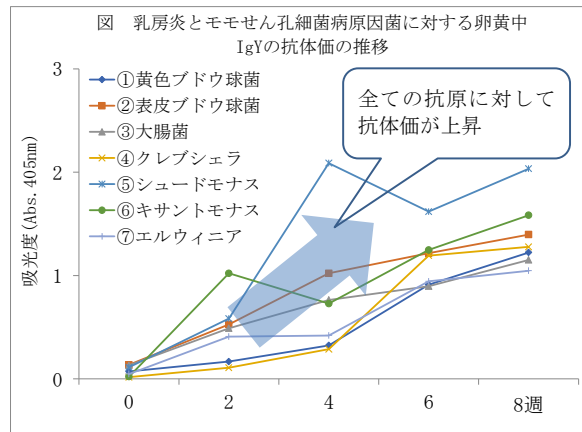
2019年4月

【月報】

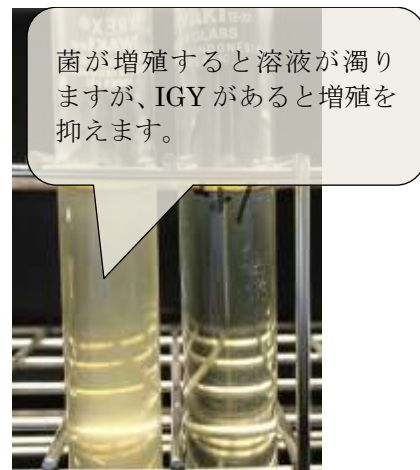
IgY 抗体で農畜産物の病気予防の可能性調査

採卵鶏に抗原（無毒化した病原菌）を接種すると、鶏卵から病原菌に対抗できるIgY抗体が入手できます。IgY抗体は、病原菌に付着すると菌の増殖を抑制する働きがあり、病気の予防効果が期待できます。また、IgY抗体は鶏卵由来のタンパク質であり、薬剤のように耐性菌出現の心配がありません。これまでに、ヒト、幼家畜、養殖魚等の感染症予防での利用例はあり、果樹等の農産物分野においても利用できる可能性があります。

そこで、当センターでは、病気が発生すると生産性への影響が大きい乳牛の乳房炎とモモせん孔細菌病の原因菌に対するIgY抗体産生およびその予防効果について検証しました。その結果、全ての病原菌に対するIgY抗体が得られ、また病原菌に対して増殖抑制効果が確認されました。



鶏は全ての抗原に対してIgY抗体を産生
(①～④乳房炎原因菌、⑤～⑦モモせん孔細菌病原因菌)



左：IgYなし、右：IgYあり
IgYと原因菌を24時間接触、溶液の濁り(増殖の違い)を確認

畜産センター

【管内情報】

春本番 牛や山羊たちが放牧場へ

碓高原牧場も待ちかねた春を迎え、畜舎で冬を過ごした家畜の放牧が始まりました。4月24日、15頭の牛がそれぞれ2箇所放牧場へと向かい、小雨の降る中でものびのびと草を食べ始め、分娩までの数か月を放牧場で過ごします。

また4月25日の「ふれあい牧場」のオープニングには地元の園児たちに手伝ってもらい、ヤギやヒツジたちを冬季畜舎から放牧場に移動しました。

草の生育に合わせて放牧地やふれあい広場の頭数を順次増やし、来場者に憩いと安らぎの場所を提供することとしています。



放牧場を行進する牛たち



子供たちが引っ越しを手伝い

畜産センター碓高原牧場

乳牛の飼料用イタリアンライグラスの収穫を開始

イタリアンライグラスは、強健で耐湿性が高く、冬作牧草（秋に播種、春に収穫）として広く栽培されています。

当センターでは、約800アールのほ場（12か所）で、生育速度が異なる複数の品種を栽培し、それぞれの生育適期に合わせた収穫作業を行っており、今年度は4月23日から開始し、5月中旬頃まで作業を行う予定です。

播種が適期（10月中）に行えたことから生育は順調であり、収量は平年並みの約70トンを見込んでいます。収穫したイタリアンライグラスはラップサイレージとして貯蔵し、飼養している50頭の乳

牛に良質な粗飼料として、1年間給与していきます。



牧草の刈り取り



牧草を白いフィルムでラッピング



サイレージを屋外で貯蔵

畜産センター